



墓地(香港墳場) 新島は、香港で「尤も美しき者」は、「公園地と埋葬地」だという。

香港の新島襄

文と写真 本井 康博 (大学神学部教授)

最初の訪問

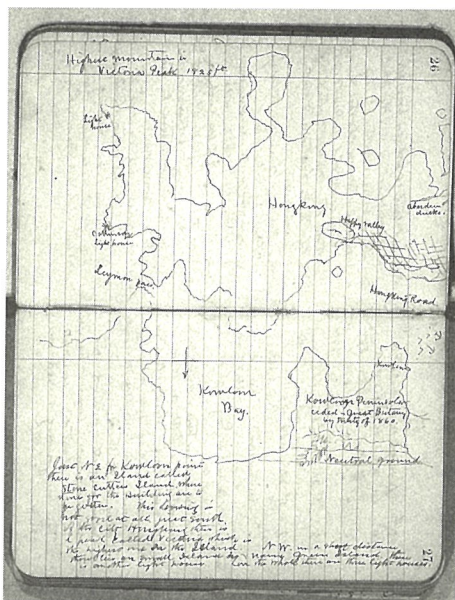
新島襄は二度、香港（香港島）を訪ねている。一度目は、函館から密出国し、ボストンに向かう途次。彼を乗せたワイルド・ローヴァー号は、1864年11月に香港に入港し、19日間、碇泊した。

この間に新島は、上陸して買い物をした。現在、同志社に残されているのは、漢訳の新約聖書だけである。ただし、本体は無く、表紙裏のページ（書き入れあり）が1枚だけ残されている。新島はこの聖書を買うために、テイラー船長（Horace S. Taylor）に小刀を売った。

新島は、上海で武士の魂、長刀をすでに手放し、櫛も落していた。「サムライから信徒」への転身は、香港でいよいよ加速したわけである。

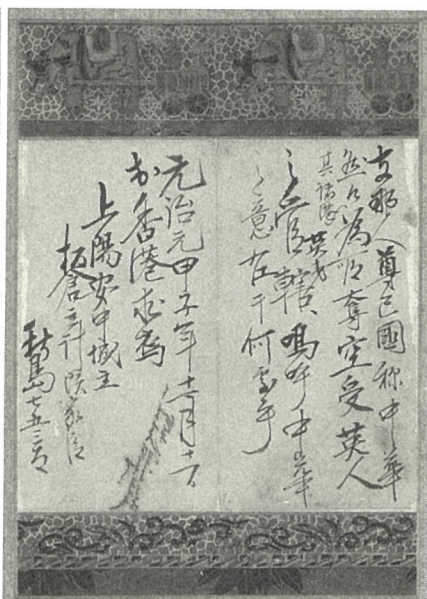
漢訳聖書

私は、2009年の春、香港に出張した。当時の聖書を探求し、同じ漢訳本が見つかれば、購入したかった。が、何も情報は得られなかった。最終日（3月11日）の朝、英華書院（Ying Wa College/



新島が描いた香港地図

最高地点はヴィクトリア・ピーク (544m) とある。
高所が好きの新島は、足を運んだであろう。



香港で購入した漢訳聖書の1ページ

「香港で元治元年 (1864) 11月11日 (新暦では、12月9日) に求めた」旨を新島は添書する。



R・モリソンの胸像 (香港・英華書院)

Anglo-Chinese College)を訪ね、聖書コレクシオンを見せてもらった。ここでも、該当するものは無かった。しかし、副産物として、思いがけなくもモリソン (Robert Morrison) やレッグ (James Legge) の情報が

収集できた。ふたりは、イギリスのミッション (London Missionary Society) に所属する宣教師である。

モリソン

まずモリソン (中国名は馬礼遜) である。1807年に中国 (最初はマカオ、ついで広東) に最初に派遣されたプロテスタント宣教師である。聖書を漢訳したのも、彼が最初である。史上、「モリソン号事件」(1837年) でも、名が残る。彼は、名門の英華書院 (Ying Wa

College/Anglo Chinese College) の創設者でもある。同校は、もともと1818年にマラッカで開校されたが、香港に転出したモリソンの後を追うように、彼の死後(1843年)、香港に移され、現在に及ぶ。

彼の教派は、スコットランド長老派教会である。が、他教派の進出にも協力的で、アメリカン・ボード(会衆派)にも積極的に中国伝道を勧めた。

ブリッジマンとパーカー

それに応じて、ボストンから広東に派遣されたのが、ブリッジマン(E.C.Bridgeman)である。裨治文の名で執筆した漢文による著書に『聯邦志略』(1838年)がある。同書を江戸で読んで、渡米の夢を膨らませたのが、青年新島である。のちに新島はアメリカで、この著者と同じ学校(アーモスト大学、アンドーヴァー神学校)に学び、同じミッシオン(アメリカン・ボード)から宣教師に任命された。そればかりか、東アジア伝道に従事した点まで、共通する。

これからしても、中国伝道のパイオニ

ア、モリソンの感化は、はるか新島にまで及ぶ。とりわけ、密出国する前の消息を新島が次のように回顧する時、その感をいよいよ深くする。

「私の好奇心を最もかきたてたのは、上海が香港で発行された2、3冊のキリスト教の書物だった」(『新島襄全集』10巻37頁)。

ブリッジマンに続く者としては、パーカー(Peter Parker)も忘れられない。アメリカン・ボードが中国に最初に送り込んだ医療宣教師である。彼は、日本開教を試みるために、モリソン号に乗り込み、禁教下の日本に入国しようとして、失敗した。

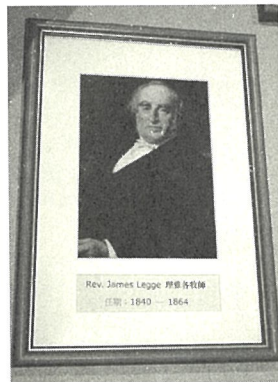
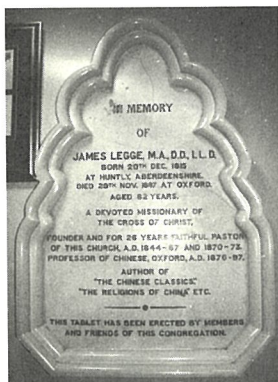
このパーカーは、のちに同志社にもゆかりを結ぶ。例の「ラットランド集會」(アメリカン・ボード年会)で新島が行なったアピールに対して、いち早く1000ドルの寄付予約をして、新島を感激させた人物である。

レッグとギユリック

中国伝道の開拓という点では、モリソンと共にレッグも重要である。理雅各の

名で漢文の『智環啓蒙』(香港、1856年)を出版した。彼は、在留外国人教会(後述するユニオン教会)の初代牧師であった。新島が最初に香港に寄港した時には、すでに牧師として活躍しているが、新島はもとより知る由もない。

レッグが世話をした人物にギユリック(John H. Gulick)がいる。後者は、新島が江戸にいる時にすでに自費で来日して



J・レッグの記念タブレットと肖像写真(香港・英華書院)

江戸に住み、アメリカン・ボード宣教師に任命されることを望んだ。

しかし、その道は、ボストン本部により財政上の理由で閉ざされた。ギユリックはやむなく、新島より一足先に香港に転出し、レッグの家に仮寓して、その時機を待った。新島が香港に着いた頃には、ギユリックはアメリカン・ボードの宣教師に抜擢されて、北中国へ転出していた。

結局、ギユリックは、最初の日本派遣宣教師になる榮譽をグリーン(D. C. Green)に譲った。しかし、のちに中国から念願の日本に転じ、同志社でも講演を行なうのは、奇遇である。

ワイルド・ローヴァー号

以上の人物のほかに注目すべきは、ワイルド・ローヴァー号の油彩画である。原画は、マサチューセッツ州チャタムの博物館(The Arwood House Museum)が所蔵する。絵は、制作者の署名を欠く。画面に残るのは、テイラー船長の名前と日付(1864年10月2日)である。

このデータは、この絵がテイラーに献呈されたことを窺わせる。船主のハーデ

ィー(A. Hardy)が、同郷(チャタム)の部下のために、特別に注文したものか。問題は、作者である。私はかつてこの絵を京都に借り出すために博物館に赴いた際、館長に尋ねてみた。

「香港の画家だ、と伝承されている」
とのことだった。この情報は、絵の完成時期と共に、有力な手がかりとなる。

船には新島が

ワイルド・ローヴァー号の香港入港は12月4日(以後、19日間碇泊)である。画面の日付から判断して、その2カ月前に絵は完成している。とすると、テイラーは自身、香港でこの絵を受け取って、ボストンへ帰港した、と考えるのが自然である。

しかも、その時、乗船していたのが、奇しくも新島である。つまり、テイラーは上海で新島を「拾い」、香港で絵を「積み込み」、ボストンに戻った可能性が高い。中国貿易を手掛けるハーディーは、わざわざ香港在住の画家に絵の制作を依頼したのか。博物館のキャプションには、中国人画家とあった。どういう人脈の画

家か、興味が湧く。

ハーディーは、たとえ中国人に絵を注文したとしても、日本人の「お持ち帰り」まで、注文した覚えはない。発注もしないアジアの青年が、絵とともに香港で自分の船に「積み込まれる」。それは、まったくの「想定外」であった。

一方の新島にしてみれば、生涯決して忘れられない船となった。「新島旧邸」(自宅)の書斎にハーディー夫妻の写真と共に、同船の写真が額に入れられて、飾られていた(いる)のも、肯ける。

二度目の訪問

二度目の香港訪問は、20年後の1884年である。滞在はわずか4日間。しかし、その間の消息は、新島の手紙や日記から、最初の訪問時以上に明白に掴める。香港に上陸するや、まず「ミッション・ハウス」を訪ねた。ブリッジス通2番地(必列者街2号)にあり、会衆派教会を併設する。前年に「香港ミッション」を立ち上げたばかりのアメリカン・ボード宣教師、ヘイガー(Charles Hager)が、活動拠点としていた。

自身もまた同じアメリカン・ボード宣教師である新島にとり、ヘイガーは同僚である。が、これ以前は、直接の交渉はなかった。そこで、日本を出る前に、神戸の宣教師 (J. Atkinson) から紹介状を貰っていた。

ユニオン教会

これが効いたのか、ヘイガーは新島に



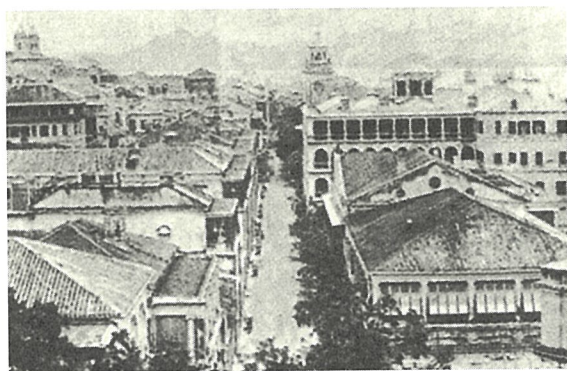
1882年当時の香港。右手前がユニオン教会 (ユニオン教会蔵)



現在のユニオン教会 (ケネディ通)

親切で、市内をあちこち案内してくれた。宿舎としてクイーンズ通の「矯風会館」(Temperance Hall) も斡旋してくれた。翌日曜には、新島は礼拝に出る。ハリウッド通の「ユニオン教会」である。初代牧師 (3代目) のレグは、すでに帰国し、オックスフォード大学の初代中国語教授になっていた。

新島が行った当時の牧師は、6代目 (



往時のクイーンズ通 (Heritage Trails in Urburn Hong Kong, p.63)
「ここだけ大分 (だいぶ) 美麗にて、日本などには比類すべき所もこれ無く、実に盛んにして、その富み亦、思い見るべし」、「この通りの店はきれいだ。ほとんどの建物は3階建て」(新島)。

(Colvill) である。満員の会衆が、彼の説教を聞いた。午後は、5代目牧師 (John Chalmers) が中国語で説教を披露した。そのほか、船員集会で主教 (Bishop Burden) も説教をする。この日、説教の「梯子」^{はしご}に、新島牧師もさすがに疲れた。私も午前中の英語礼拝 (3月8日) を現在のユニオン教会 (ケネディ通) で追

体験できた。教会が現在地に移転したのは、1889年である。

市内見物

その後、私は香港滞在最終日のわずかな余暇（2時間）を利用して、新島が足を運んだ「ビショップ・ハウス」（聖公会会督府）や市庁舎（Government



旧香港總督府（現・香港礼賓府）

香港で「尤も著しき者は、香港之市庁、兵丁之営所と四ヶの埋葬地なり」（新島）。

House、現・香港礼賓府）、公園（香港動植物公園）、墓地（カトリック、イスラム教）を大急ぎで巡回した。

新島が3人の日本人領事を訪ねた日本領事館（今は総領事館として、交易広場にある）や、宿泊したテンペランス・ホールは、その跡地を確認できなかった。ほかにも、新島が見物した英軍駐屯所現



香港動植物公園

Harcourt Garden、夏慤花園）や太平山街（Tai Ping Shan St.）、中国人街（アヘン窟）は、時間不足のため、回れなかった。

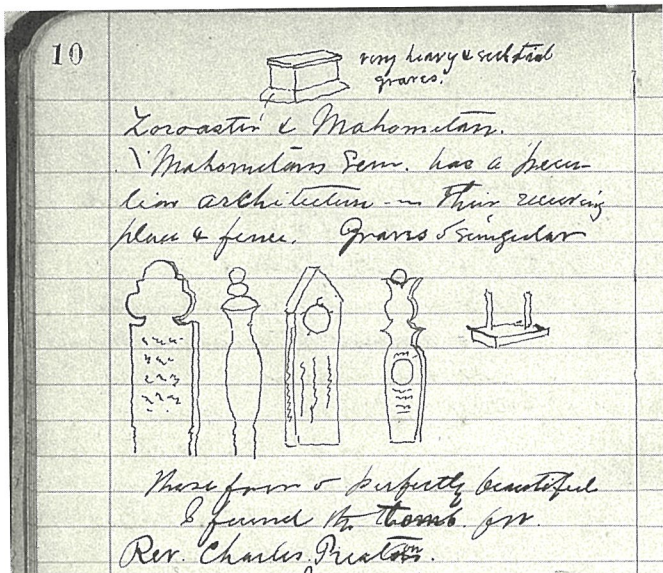
孫文と新島

最後に、香港と新島を繋ぐ人物をもう一人紹介しておきたい。孫文（中山・逸仙）である。彼はハワイで少年時代を過ごし、キリスト教の感化を大いに受けた。香港に戻ってから教会に通い、まもなく洗礼を受けた。

新島が訪問する前年6月のことで、場所はその地の会衆派教会、すなわちミッシェン・ハウスである。教会の洗礼簿には、2人目の受洗者として名が残る。洗礼を授けたのは、ヘイガー牧師である。

時に孫文18歳。ミッシェン・ハウスの3階に住み、近くのセントラル・スクール（中央学院）に通う学生であった。ミッシェン・ハウスに出入りする新島と、どこかで接触していても、けつして不思議ではない。ヘイガーから紹介された可能性すらありえる。

孫文が寄宿したミッシェン・ハウスは、1900年にアメリカン・ボード（美国



新島の墓地スケッチ

新島は特にイスラーム教徒の墓に関心を持った。「墓は風変わりだ。次の4つは、とりわけて美しい」とスケッチをする。



ビショップ・ハウス（聖公会）

新島は主教を訪ね、この地のキリスト教の現況について広く取材した。

公理会）が手放した時に取り壊された。現在は市場（マーケット）である。その前には、「美国公理会福音堂跡地」の案内板が立つ。が、現地は、むしろ「孫文歴史街道」（Sun Yat-Sen Historical Trail）の第三巡回地点として有名である。

信徒としての孫文

孫文は「中国革命の父」である。が、革命家の底流には、若き日の信仰が伏流していた。たとえば、中国基督教青年会（YMCA）での講演「国民は人格を以て国を救ふを要す」である。

「余も曾つて二、三十年前、此の団体と往来し、従つて會員の友人は非常に多い」とか『孫文全集』

5、119頁、第一公論社、1940年）、「中国の団体で立派な人格を有するのは、青年会である。故に、青年会は良好なる国家を造成し得る団体である」、「四億人の悉くを人格者たらしめんとせば、「中略」国家全体を変じて、青年会たらしめばよいのである」などと主張する（同前5、124頁）。

単なる社交辞令とは、とても思えない。魂の底から発せられた叫びである。あくまでも「人格」（品格）を強調してやまない点など、どこか新島の文明観を髣髴とさせる。